ほしのこ・じょーじい〝しんねん〟をさがす

阿部結（あべゆい）

ぼくは、ほしのこじょーじい。

ほしのこには、まいにちだいじなしごとがある。よるになると、そらをながれてまちをみおろして、ねむれずにほしをみあげていることをさがす。みつけたら、そのこんちにとんでって、ねむくなるまでいっしょにあそんであげるんだ。

こないだのよるなんか、サンタさんをまっているこばっかりで、しごとがほんとにたいへんだった。きょうのまちも、なんだかいつもとようすがちがう。まちのいえのドアには、なわでつくったわっかみたいなものがかかっていて……あ！　きょうもねむれないこ、みーつけた。それゆけ、ひゅーん！

「……わあ、ほんとうにきてくれた。〝しんねん〟、きみにあいたかったんだ！」

「まってまって。ぼくは〝しんねん〟なんかじゃない！」

「え、ちがうの？　じゃあ、きみ、だれ？　なんのよう？」

ぼくはおおきくいきをすって、おきまりのあいさつをした。

「わがなはほしのこ、じょーじぃ。まいよ、ねむれぬこどものもとへとんでゆき、ねむくなるまでいっしょにあそんであげるのが、われらほしのこのしごとなのであーる」

「オッケー、じょーじぃ。ぼく、チー。あのね、ぼく、あそんでるひまないの。〝しんねん〟がくるのをまってるんだから」

「なんなの？　その〝しんねん〟って」

「〝しんねん〟は、みんなをうれしくてたのしいきもちにするものさ。でも、〝しんねん〟は、みんながねむっているうちにしかこないんだって。だけどぼく、どうしても〝しんねん〟にあいたくて、こうしておきてまってたってわけ」

「ふーん、なんだかぼくも〝しんねん〟にあいたくなっちゃった。ねえ、いまからいっしょにあいにいこうよ」

「それって、さいこう！」

「よーし、きまり。チー、〝しんねん〟ってどんなやつで、どこにいるの？」

「しらない。みんながねむってるときにやってくるって、それしか」

「うーん……それだけじゃ、さがすの、むずかしいなあ。あ、みんながねむっているときにやってくる、ってことは〝しんねん〟はだれにもすがたをみられたくない、はずかしがりやなんじゃない？」

「そうかも。じゃ、だれもいないところ、さがしにいこう！」

「いいね。チーはそらとべないから、あるいていくよ。さ、じゅんびして」

「こうするの！　えいっ」

チーったら、むりやりぼくにおんぶした。

「おもっ。もう、しょうがないなあ」

ぼくは、あしをぐーっとふんばって、ひゅーん！　チーをのせて、よるのそらにとびだした。

やまおくのこわれたあきや。うみべのいわかげ。まよなかのゆうえんち。くらやみのなか、ぼくら、いっしょうけんめいさがしたけれど、〝しんねん〟はちっともみつかんない。つぎのばしょへさがしにいこうと、ひゅーん！　していたそのとき。そらから、なにかがおちてきた。きらきら、きらきら。

ひかりながら。

「みて、チー、きらきらがおちてきた！　ひょっとして、これが〝しんねん〟じゃない？」

「じょーじぃ、これは〝ゆき〟。こおりのけっしょうだよ。そんなこともしらないの？」

「ゆき……」

ぼく、チーのことをすっかりわすれて、ずっとずーっと、ゆきをみてた。きらきら。きらきら。なんてきれい……

きがつくと、チーはぼくのかたにあたまをのせて、うとうと、うとうとしはじめていた。ぼく、あわててチーのいえにひゅーん！　して、ベッドにねかせておふとんかけた。

しずかにへやをでようとしたら、せなかから、チーがささやくこえがした。

「ねえじょーじぃ、やっぱりさ、きみが〝しんねん〟なのでしょう……？」

「ちがうよ、ぼくは……」

ふりむいたら、チー、もう、ねむっていた。

ふーう。きょうのしごともいっちょあがり。ゆき、おみやげにもってかえって、ママに〝しんねん〟のこときいてみようっと。

（おしまい）

絵・阿部結